博士学位論文審査報告

題　　目：	野口雨情研究――童謡・民謡詩人の伝記的考察
氏　　名：	金子（谷津）未佳
論文審査委員：	主査　山口直孝　本学文学部教授
	副査　江藤茂博　本学文学部教授
	副査　庄司達也　東京成徳大学人文学部教授
	副査　町　泉寿郎　本学文学部教授

論文要旨

本論文は、童謡詩人野口雨情（1882年〔明治15〕～1945年〔昭和20〕）の伝記研究であり、『〈日本の作家100人〉　野口雨情――人と文学』（勉誠出版、2013年9月）を基盤としたものである。雨情の足跡の解明や作品の発掘によって先行研究の空白を埋めることが目指され、とりわけ詩壇に登場前後の地元茨城での創作活動の実態の把握に力が注がれている。

本論文の分量は、400字詰原稿用紙約860枚であり、構成は、以下の通りである。

序論

第一章　学生時代――詩壇登場
　一　生い立ち
　二　東京専門学校時代
　三　初期社会主義思想と挫折
　四　水戸における作品発表と郷土紙『常總新聞』
　五　「野口夕吹」と雨情

第二章　青年時代――再起を期す
　一　帰郷
　二　郷土紙『いはらき』との関わり
　三　『枯草』出版
　四　筆名の変遷について
　五　意欲旺盛な一年
　六　結婚――妻ヒロと野口秋星

第三章　樺太、北海道時代――落魄詩人

一　樺太行き
二　『朝花夜花』出版
三　北海道時代の雨情と石川啄木
四　「詩壇空白期」へ

第四章　詩壇への復活
一　木星記念会
二　長久保紅堂との再会
三　『茨城民友』掲載作品
四　『都会と田園』出版
五　「枯れすすき」と水戸時代

第五章　童謡・民謡詩人として
一　上京
二　童謡詩人野口雨情――『金の船』『金の星』
三　童謡普及運動と「夕焼論争」
四　民謡詩人野口雨情――民謡集『別後』出版

第六章　昭和初期の雨情とその晩年
一　新民謡運動と旅――「高松小唄」を一例として
二　校歌・社歌等の制作
三　戦時中の作品と晩年の創作
四　終焉の地へ

結論

野口雨情略年譜

主要参考文献

資料　野口雨情著作・資料年表（活躍前期）

「序論」では、野口雨情没後の研究動向が、新資料の発見を軸にたどられている。家族・知人・地縁者・愛読者らによって結成された複数の会における顕彰活動を通じて、雨情の伝記研究が着実に進展したものの、活動の初期や詩壇にあまり登場しなかった時期の動向については不明の点が多かったことが指摘されている。先行研究の問題を整理しながら、本論文が年譜の空白を埋めることで雨情の足跡を明らかにし、童謡・民謡詩人としての野口雨情を検証していく上で基盤を築くものであることが述べられている。

「第一章　学生時代――詩壇登場」では、雨情の誕生から詩壇登場までの時期が扱われている。「一　生い立ち」では、誕生当時の野口家の家族関係、経済状況が説明され、学

歴が確認されている。高等小学校の友人渡辺源四郎から文学的影響を受けたこと、上京して東京数学院尋常中学に進学した際には叔父野口勝一に世話になったことなどが述べられ、また、その後進学した順天求合社中学校の中退時期については、友人宛ての書簡の文面から1900年以降の可能性が高いことが新たに指摘されている。「二　東京専門学校時代――詩壇登場」では、1901年に東京専門学校高等予科文学科に入学した雨情が本格的な創作活動を行っていく過程が追跡されている。1902年には大阪で発行されていた雑誌『小柴舟』や『新天地』に新体詩が発表され始め、「雨情」の筆名も使われるようになる。同時期の雨情が『婦人と子ども』・『少国民』・『女子の友』といった女性・子供向けの雑誌や『労働世界』・『社会主義』のような社会主義の傾向の強い雑誌にも寄稿していたことが記され、「北濤野人」などの筆名を用いて『世界一の旅行博士』という童話を発表していたことが新発見の事実として挙げられている。「三　初期社会主義思想と挫折」では、原霞外・児玉花外との交流を通じて『労働世界』（のち、『社会主義』と改題）と関わるようになった雨情の、同誌に寄せた作品群が見渡されている。第一詩集『枯草』に収録される「村の平和」を含むそれらには社会主義への共感と共にキリスト教の影響も看取される。雨情が日露戦争の頃には社会主義から離れたという従来の見解については、1905年の時点で『いはらき』の新体詩選者として反戦詩を採っていることが反証として挙げられ、見直しの余地があると指摘されている。「四　水戸における作品発表と郷土紙『常總新聞』」では、『学報』・『いはらき』・『常總新聞』など水戸で刊行されていた紙誌での雨情の活動が追跡され、新聞記者をしながら小瀧水郷・鹿野目徑ら同世代の青年と親密な関係を形成していったことが述べられている。「五　「野口夕吹」と雨情」では、『常總新聞』1901年10月19日に発表された夕影（矢橋夕影）「懐友帖」で呼びかけとなっている「野口夕吹兄」が雨情であることを周辺資料や表現から判断されている。また、友人とのつながりから雑誌『小柴舟』との関係が生じたこと、二人の「さびしき名」という認識の共有が筆名を改めさせたことなどが推測されている。さらに、『いはらき』記者であった東白蘋がそれまで雨情を認知していなかった理由が、雨情が別名を使用していたこと、非常勤で勤めていたという事情に求められている。

「第二章　青年時代――再起を期す」では、家庭の事情で中央文壇を離れざるをえなかった時期が考証されている。「一　帰郷」では、1904年1月に父量平を亡くし、家督継承のために帰郷した雨情が雑誌『あけぼの』に作品を発表していたこと、生涯の友人久木独石馬との交流を深めたことが確認されている。「二　郷土紙『いはらき』との関わり」では、雨情の創作が活発化し、『常總新聞』・『いはらき』などに詩を多数発表するようになる1905年以降の時期を対象に、検討が加えられている。『いはらき』に発表された「北洞野客」名義の随筆が雨情の作品であると判断され（随筆中の筆名の知人も特定されている）、友人との交流の中で漂泊意識が形成されていったことが示されている。また、発表作品が第一詩集『枯草』に収録される際にどのように改稿されたかが調査されている。さらに、『いはらき』の詩の投稿欄の選者になった雨情が選んだ「安田雨村」名義の作品が雨情の手によるものではないかという可能性が指摘されている。「三　『枯草』出版」では、1905年に水戸市の高木知新堂から自費出版された第一詩集『枯草』の成立事情が考察されている。当時の案内書などに基づいて刊行元の高木知新堂の営業状況が明らかにされた後に、詩集の構成、初出の書誌情報が挙げられている。『枯草』という暗さを感じさせる題名は、

社会主義を主張できない自己への検証意識に拠ると言う。また、『いはらき』に掲載された東白蘋による紹介文などを踏まえて、未完成ながら清新な詩風が評価されていた状況が明らかにされている。さらに関連して、同時期に雨情が同郷の文学者たちと木星会を結成し、同会での活動を通じて民謡や子守歌の創作を始めていたことが確認されている。中央文壇での反応や後の評価を通覧した上で、文語文体詩を基調としつつ、童謡的な作品を含む『枯草』は、雨情の原点と評価するに足る詩集であると結論づけられている。「四　筆名の変遷について」では、雨情が別に「烏城」・「烏蝶」・「雨蝶」・「芋杖」・「勿南」・「勿南壮士」・「勿来の居士　大螺吹太郎」・「蚊骨」・「木剣壮士」・「草中木治」・「北洞野客」・「北鳴野人」・「北濤」・「北濤野人」などの筆名を用いたことが指摘され、「北洞野客」名義の俳句（『ホトトギス』1906年1月）が新たに雨情作品であることが特定されている。同時に、雨情筆とみられていた「雨蝶」作の俳句・和歌（『文庫』1897年4月）については、雨情が俳句に近づくのが後のことであることから、別人のものと判定されている。雨情の俳句作りは、武石女羊らと茨城磯原で結成された潮響会での活動から始まったものであり、「北」を筆名に好んで入れたのは、父や伯父の好みに倣ったこと、北海道・樺太に対する関心の反映であることが推察されている。「五　在京紙誌での活躍」では、1905年に雨情が水戸で刊行された『軍國之少年』・『急先鋒』にも寄稿しており、さらには『月刊スケツチ』・『毎日新聞』・『讀賣新聞』・『ハガキ文学』などの中央の紙誌にも作品を発表するなど、創作活動が活発な年であったことがたどられている。1905年は、雨情にとって詩人としての方向が定まると同時に、家の事情から悲嘆に駆られる両義的な年であったと概括されている。「六　結婚――妻ヒロと野口秋星」では、高塩ヒロとの結婚生活が検証されている。関係資料および先行研究を批判的に見直し、雨情・ヒロが1904年11月に婚礼、1905年5月に婚姻届を提出したと特定されている。また、ヒロが「秋声女史」の筆名で『いはらき』に文章を発表するなど文才があり、野口の創作に影響を及ぼすと同時に、勝気な性格が雨情の友人から好意的に受け止められなかった面があったことに注意が向けられている。

「第三章　樺太、北海道時代――落魄詩人」では、1906年から1909年にかけての樺太、北海道在住時の足跡・創作活動が対象とされている。「一　樺太行き」では、1906年に定型の俗謡に関心を深めていた雨情が、伯父勝一の死後に樺太に赴いた経緯が考察されている。国境線を確定させる劃境委員あるいは報知新聞通信員として雨情が渡航した、あるいは事業目的で向かったというこれまでの諸説がいずれも明確な根拠を持たないことが示され、判断が保留されている。また、「樺太航路」（『ハガキ文学』1907年2月）などから、雨情が樺太に積極的な関心を寄せ、正しい知識を持っていたことが指摘されている。「二『朝花夜花』出版」では、1907年1月、3月に自費出版された詩集『朝花夜花』の意義が論じられている。後に雨情が「日本に於ける最初のパンフレツト」と称した本詩集において、童謡に近い口語定型詩が試みられ、「七つの子」の原型となる「山烏」の収録が示すように、童謡・民謡詩人としての基盤が確立されたと評価されている。直後の北海道行については、詳細な事情は不明としながら、鬱屈した思いを抱えての選択であったと推測されている。「三　北海道時代の雨情と石川啄木」では、消息記事などを手がかりに雨情が北鳴新報社・小樽日報社・胆振日報社などで新聞記者を務めていたことが説明されている。現存する『小樽日報』第三号の無署名記事のうち、「樺太の露人」が雨情筆であると判断さ

れているほか、石川啄木との関わりや坪内逍遥の励ましを得ながら、雨情が北海道での見聞を創作に活かそうとしたことがたどられている。「四「詩壇空白期」へ」では、東京に戻った雨情が有楽社『グラフィック』の編集に携わりながら、口語俗謡詩への意欲を強めていたにもかかわらず、母テルの死亡と有楽社の解散とによって1912年6月より故郷磯原に逼塞しなければならなかった時期が検討されている。諸資料から雨情が高塩家の地主経営を手伝ったり、漁業組合長や消防団長を務めたり、万弁社という事業体に関わったりしていたこと、財産分与の問題から戸籍上ヒロと1915年5月に離婚し、1917年に至って実質的な夫婦生活も解消されたことなどが考証されている。

「第四章　詩壇への復活」では、1918年地元での文学運動をきっかけに再開した、雨情の創作活動が検討されている。「一　木星記念会」では、1918年1月6日に水戸市で開催され、横瀬夜雨・山村暮鳥ら約三十名が集った木星記念会への出席に刺激を受けた雨情が創作を再開させたこと、中里つると再婚した新婚家庭で詩作に集中していたことが述べられている。「二　長久保紅堂との再会」では、再開した創作の発表舞台として、旧友長久保紅堂の経営していた『茨城民友』・『茨城少年』が大きな役割を果たしたことが指摘されている。「三『茨城民友』掲載作品」では、『茨城民友』に掲載された作品（現物未確認のものを含む）がすべて旧作の再発表であり、創作再開前の雨情が自身の名を世間に再認識させるための行為であったと推量されている。「四　『都会と田園』出版」では、1919年6月に東京の銀座書房から刊行された詩集『都会と田園』が分析されている。収録作品が確認された後、後半の『己の家』連作が通覧され、韻文構造を孕んだ口語自由詩の独自な達成が帰郷後の雨情が目にした風景に基づくものであることが述べられている。また、詩集刊行後も雨情が『茨城民友』の社員として文芸主任を務め、地元との繋がりを重んじていたことにも触れられている。「五　「枯れすすき」と水戸時代」では、水戸時代の代表作である『枯れすすき』（原題『船頭小唄』）が検討されている。利根川や潮来を舞台とした本作を、雨情が実景に触れないまま作った事情に触れ、想像を膨らまることが雨情の創作方法の一つであったことが提示されている。また、水戸在住時に雨情は、「尋常小学国語読本に載れる韻文の芸術的詩価値」（『茨城教育』1920年6月）などの評論も発表しており、民謡・童謡の価値を確信するようになっていったことにも注目が必要であることが述べられている。

「第五章　童謡・民謡詩人の誕生」では、童謡・民謡詩人としての活動が本格化し、地位を確立させていく時期を対象に、創作の軌跡と童謡普及の運動の実態とが調査されている。「一　上京」では、西條八十から斎藤佐次郎を紹介された雨情が、斎藤の始めた『金の船』（のち『金の星』）に1919年11月の創刊号から毎号童謡を発表するようになり、『鈴虫の鈴』や『四丁目の犬』といった代表作が曲譜付きで掲載されていったことが説明されている。また、翌年三月から投稿欄の童謡選者になった雨情が選評で童謡を「一番優れた、一番たふとい国民詩」という主張を唱えていたことにも触れられている。「二　童謡詩人野口雨情――『金の船』『金の星』」では、『金の船』発表作品を中心に、雨情の童謡詩人としての活躍が検証されている。雨情は、『十五夜お月さん』・『千代田のお城さん』などの代表作を発表し、『童謡作法問答』（尚文堂、1921年10月）などの手引書を手がけるようになる。童謡論においては、雨情が、童謡を禁ずる教育政策に批判的な立場を取るな

ど、教育への関心を強めていったことや、児童雑誌の衰退の中明るさに重点を置いた「新おとぎ唄」を新たに提唱していたことなどが注目されている。『コドモノクニ』・『金の星』など発表媒体を多く得た雨情は、『シャボン玉』・『黄金虫』などを精力的に発表していった。最初の童謡集『十五夜お月さま』（尚文堂、1921年6月）が文部省認定図書となり、さらには皇族の台覧の対象となったことが表すように、雨情の社会的地位は揺るぎないものとなっていった。『七つの子』については、解釈が分かれていた「七つ」の理解を、雨情の発言に基づいて「たくさん」と解する立場が採られている。『證誠寺の狸囃』（『金の星』1924年12月）については、證誠寺の住職から作り物という抗議を受けた挿話を挙げながら、雨情の童謡創作の方法が示されている。「三　童謡普及運動と「夕焼論争」」では、1920年9月の東京童謡会結成以降の雨情の精力的な童謡普及運動の具体が追跡されている。『金の船』の消息記事などを参照することで、雨情が全国の教育現場に出向き、唱歌に代わるものとして童謡を薦め、教師や児童に創作や歌唱を促していった活動の詳細が明らかにされている。雨情の運動は、地方での童謡普及運動の誕生を促すものであると同時に、異なる童謡観を持つ者との衝突をも生んだ。『常總新聞』紙上で雨情と横瀬夜雨との間で繰り広げられた「夕焼論争」の経緯が、関係者の言説を含めて詳細に提示され、歌謡の一分野として童謡をとらえる雨情と児童自由詩の中で広く童謡を考える夜雨との立場の異なりが論争の原因であったことが考察されている。「四　民謡詩人野口雨情――民謡集『別後』出版」では、民謡集『別後』（尚文堂、1921年2月）以後の雨情の創作民謡をめぐる活動が見渡されている。童謡の普及活動と並行して、雨情が創作民謡の演奏・講演会を全国で催したこと、「耳の詩である、音楽である」という考えに立って『極楽とんぼ』（黒潮社、1924年1月）などの民謡集を次々と刊行していったことが説明されている。

「第六章　昭和初期の雨情とその晩年」では、戦時色が徐々に強まっていく時期における雨情の創作の変化が検証されている。「一　新民謡運動と旅――「高松小唄」を一例として」では、「国土的作品」として「新民謡」の創造を訴えて1928年に日本民謡協会を設立した雨情のさまざまな取り組みが確認されている。運動の実例として「高松小唄」制作に際して雨情が地元とどのように関わりを持ち、いかに取材して詩作に結び付けていったかが挙げられ、多数の人間と交渉の中で一つの作品が生まれていく実情が提示されている。「二　校歌・社歌の制作」では、雨情が手がけた校歌・社歌が取り上げられている。土浦市立土浦小学校校歌やキッコーマン醤油社歌など、地元のものを始めとする校歌・社歌が相当数に上ることが記され、1938年から1941年に制作が集中しているのは童謡の作詞が減ったことを受けてのことであるという事情が推察されている。なお、新聞記事の発掘により、1928年に雨情が託児所吉祥寺児童園の設立に関わったことが付け加えられている。「三　戦時中の作品と晩年の創作」では、児童雑誌の減少に伴い、童謡の発表が減少すること、『満州前衛の歌』・『爆弾三勇士』など、軍隊や戦争に取材した歌が増えていく晩年が取り扱われている。「戦争は詩にならない」と子どもに語っていた雨情が、意に染まないことでありながら、周囲の求めで時局迎合的な作品を発表し続けた事情が説明されている。「四　終焉」では、1944年1月、病気療養のため、栃木県河内郡姿川村鶴田に疎開した雨情が1945年1月に亡くなるまでの状況が略述されている。当時の報道が紹介され、また、遺稿となった詩について、夫人による加筆という証言に疑念が挟まれている。

「結論」では、本論での具体的な検証を踏まえて、新たに判明した伝記的事実や書誌的情報が確認されながら、時期ごとの雨情の創作活動の特徴が整理されている。新体詩人として出発した雨情は、童謡・民謡詩人としての地位を確立した以降は、それらの創作に専念し、ジャンルの普及に努めた。雨情の童謡・民謡詩人としての活動は主体的なものであり、広く世に受け入られたのは、創作の方向性が時代の趨勢と一致していたための現象であり、あくまで結果であったと総括されている。

「野口雨情略年譜」は、本論の成果を反映させてまとめられたもので、著述目録を兼ねている。私人としての足跡が記されると同時に、地元詩誌や少年誌などを発表媒体に含む雨情の活発な創作が丹念に拾われている。「資料　野口雨情著作・資料年表（活躍前期）」は、童謡詩人として活躍を始める1920年までを活躍前期として区分し、現時点で確認できる野口雨情の全業績（草稿・書簡を含む）および言及文献を年代順に並べたもので、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書　第五四巻』（昭和女子大学近代文化研究所、1983年4月）収載の「著作年表」・「資料年表」（槍田良枝編）を大幅に増補したものとなっている。

審査結果要旨

本論文は、野口雨情の足跡を綿密な資料調査によって正確にたどろうとした伝記研究である。雨情の伝記には、すでに平輪光三『野口雨情』（雄山閣出版、1957年7月）、長久保片雲『野口雨情の生涯　創作民謡・童謡詩人』（暁印書館、1980年9月）、野口存彌『野口雨情　詩と人と時代』（未来社、1986年3月）、野口不二子『郷愁と童心の詩人　野口雨情伝』（講談社、2012年11月）などがあるが、近親者・知人による評伝は、十分な裏づけのないまま雨情の証言を事実として扱ったり、時期によっては記述が粗かったりするなどの問題をはらんでいた。年譜・書誌については、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書　第五四巻』（昭和女子大学近代文化研究所、1983年4月）収載の槍田良枝編の「著作年表」・「資料年表」や『定本野口雨情』（未来社、1985年11月～1987年1月）収載の野口存彌編の「年譜」があるが、その後に発見されたさまざまな資料に基づく成果が反映されておらず、不十分なものにとどまっている。そのような現状を踏まえ、本論文では、新出資料の検討やさらなる文献の発掘を精力的に行うことで雨情の活動をより精確に記述することが目指されている。とりわけ、不明の点が多かった地元茨城での動向について、散逸している地元詩誌に当たることで伝記の空白部分を埋めることが心がけられている。

本論の成果としてまず挙げられるべきことは、数多くの伝記的事実を解明・確定させたことにあろう。例えば、『小柴舟』1902年1月号の野口夕吹「枯露柿」が雨情作であること、中央文壇への橋渡し役として常總新聞社の同僚であった矢橋夕影が介在したこと、父の死去で帰郷した雨情が地元誌に新作を発表していたこと、「北濤野人」が雨情の筆名の一つであることなどが、本論文で指摘されている新たな事実として挙げられる。また、新出資料によって裏づけながら、社会主義の受容が初期に限定されない持続的なものであったこと、雨情の結婚が、婚礼と婚姻届の提出とがずれるものであったことなどの指摘は、

妥当な判断であり、今後定説となっていくものであろう。

本論文によって、従来不明であった雨情の初期の活動が詳細にたどれるようになったことは意義深い。とりわけ、雨情と茨城の活字メディアとの結びつきを考証し、地元で培われた人脈を通じて雨情が発表舞台を得ていったこと、詩壇空白期の雨情が飛躍を期して創作活動を持続させていたことを突き止めたことは注目される。茨城と東京との往還、さらには北海道への転勤など、移動をしながら雨情が習作期を送ったことは、童謡・民謡詩人を準備した環境として重要であり、具体的な動向は作品研究の大きな手がかりとなる。雨情の詩集が刊行直後どのように受容されていったかを、さまざまな紙誌の紹介記事を集積することで浮かび上がらせた成果も同様である。また、童謡・民謡の普及活動で全国を行脚した雨情の足跡が紙誌の消息記事を参照することで具体的に突き止められていることも、伝記研究を着実に前進させるものである。

本論文の実証的な考察が持つ意義は、高く評価されてよい。従来の野口雨情の伝記の偏りや不十分さが補われ、新たに見出された文業と合わせて検証されることで、実生活と創作との相関はより詳細に把握することが可能になった。推測を極力排した客観的な論述も信頼性を高めるものであり、本論文が野口雨情研究の基盤を固めるものであることは疑いえない。

伝記研究は、時間を要する研究領域であり、対象とする文学者の生涯をくまなく見渡すことは容易ではない。本論文においても、童謡・民謡詩人としての活躍が本格化する時期以降の論述にはまだ手薄な部分が見られ、今後の増補が望まれる。また、作品分析を積み重ねた上で野口雨情が童謡・民謡詩人としていかなる功績を残したのか、文芸史に位置づける考察を展開する必要もあろう。

上述のような課題はあるものの、本論文が精密な伝記研究として野口雨情研究に寄与する意義を持つことは確かである。審査員は、本論文が「博士（文学）」（乙）の授与に相当するものであることを全員一致で認定する。